
今日から・・・

箱赤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今日から・・・

【Nコード】

N9750H

【作者名】

箱赤

【あらすじ】

夢の中で神様に何かを依頼され異世界に行く事になったが、依頼内容を忘れてしまい、気ままに冒険するコメディ？ストーリー

ブログ：旅立ちます（前書き）

初めまして今回投稿させて頂いた、箱赤と申します。

文章中、誤字脱字や、気分を害する文章等、御座いましたら指摘していただけるとありがたいです。

尚、ジャンルやカテゴリでおきに召さないものがありましたらお読みになら無いようお願いします。また、気分を害された方への保障はいたしかねませんのでご了承ください。

プロローグ：旅立ちます

白い空間に1人漂う黒髪の少年がいた。

「んんん、なんだこは？」

自分の手さえも見えるかどうかの白い霧の中、呆然としているところからとも無く声が聞こえる。

「いきなりで悪いんだが、君には別の世界、異世界を旅してもらおう」

「うわお、いきなりなんだ？異世界？」

謎の声は聞き手によっては病院送りになってしまいそうな危ないセリフであった。

「ああ、そうだ、その世界で・・・をして欲しい、・・・がしやす
いよう、君の望む能力を1つ与えよう。何を望む？」

その声は疑問に軽く答え、何かを依頼して来た。聞いた限りではなんとかできそうな感じだったので、一度使いたかった能力を迷い無く応える。

「んん、じゃあ、5次元操作で」

「ほう、それなら多少制限がつくがよいか？」

制限と言ふ言葉により若干の不安を覚えながら内容によっては依頼を達成できないと思ひ聞いてみる。

「ん？例えば？」

「君が今知っていることはできるが、それ以外はできん、あと、効果範囲が小さい」

「おk、把握、それだけあれば十分だ」

頭に描かれた能力が効果が薄かろうと実行できるならもはや敵無しと高ぶる気持ちを抑えつつ返事を返す。

「準備が整い次第、別世界に飛ばすから・・・のこと宜しく頼んだぞ」

「まかせときな、これが使えれば、・・・なんて楽勝よ！」

周りの白い霧が濃くなる中、声の主らしきものがみえ、ああヒゲ青いなあと場違いな事を考えていると意識が遠のく感じがした。

「・・・」

それと同時に何かに呼ばれる声がする。

「・・・さー」

とても聞き覚えのある声に意識が戻されていく。

「おきなさい！」

目が覚めたときには目の前に白い何かが見えた。

「ぶはっ!?!」

「早くおきなさいい」

と怒っているのは1人で起きれない(起きようとしない)俺を起こしてくれる姉貴だ。今回の姉貴セレクションはどうやら俺が使っていた枕のようだ。

「毎回起こすときはやさしくとあれほど・・・」

「あら、今日は枕だったんだから感謝しなさい」

なんだかんだで起こしてくれる優しい?姉貴である。

「へいへい、所で今何時だ?少々暗いが・・・」

「朝5時よ、朝練いくんでしょ?」

「ああ、んじゃあ、飯を食べる前にと」

「はいはい、ご飯用意しとくから早く降りてきなさい」

筋肉大好きな父のトレーニング室で朝起きていつものメニューを済ませるといい香りがしてきた。香りにつられ台所に行くとテレビから聞こえてきた。

「いて座のあなた、思いがけない事が起きる1日、
良い事の連続にハッピーな日をおくれそう!

ラッキーパーソンはヒゲの小父さんですw」

どつちから今日はいいい一日になりそうだと喜びテーブルにつく。

「おお、今日はいいい感じだ」

「ご飯たべてさっさといくわよー！」

「へいへい、と」

朝ご飯を食べ終わり、仕度を素早くすませ玄関へと行く。

「んじゃあ、いってきま〜す」

「はい、いってらっしゃい」

後ろから聞こえる声を背にドアノブを回し、まぶしい光に包まれ今日もまた良い日を迎えることに喜びながら家を出た。

静寂に包まれた空間に一人の少年が光を帯びて現われた。

黒い学生服を着た黒髪の少年は、帯びていた光が消えていく中、右手を前に突き出しながら啞然とした表情で立っていた。

「あれ？少し暗く無いか？」

先ほどまで目覚ましテレ を見ていたのでこの暗さは異常だと思い
辺りを見回す内に目が慣れてきた。

どうやら、木が沢山生えており森の中だということとはわかる。

「な、なんじゃこりや〜〜〜〜！、あ、いや待てよ、そういえば
今日見た夢でなんか言ってた気がする……。だぁー！なんだっ
けなんて言ってたっけ？」

「異世界へ行くこうっていつてなかったか？」

「そうそう、そうだ！、異世界へ行くこう！だ、ん？あああ〜〜お
前は！」

声のした方を向くと夢の中で出てきたヒゲの小父さんがいた。

「チヨ、あれまじだったのか……。」

「ああ、まじだ。ようやく準備ができたからすぐに移転をしたぞ。」

小父さんは似合わない若者の言葉を使い、口元から顎^{あご}、のど仏に差
し掛かるくらいのおふっさふさな青いひげを大事そうになでていた。

「普通あのタイミングですか？そもそも、なんの理由で異世界な
んて……。」

「ん？理由は夢の中で……。まあ、いい、すぐにして欲しいこと
でもないし適当にすごしていいぞ、その時になったらまた会いに
来るから。」

すごく気になる止め方をした肝心のところが聞けなくて、なんだかむずむずする感覚に襲われた。

「ちよ、内容すげー気になるし」

「ちなみに願い道理に力を与えたからがんばりなさい」

「はい、まいつか、「ピカツ」まぶしいつ、あれ？」

気になるが、物事をよく考えない性格をしている俺は早速忘れ始めた。すると、少し光ったと思ったときには居なくなっており、一冊の本、刀やメモが置かれていた。

メモには、

「その本を持っているときに能力を発動すると覚えることができるから常に身に付けなさい。」

本は、存在を体にかぶせられるが、異様に体力を吸われるから、気を付けなさい。

行動により、称号が手に入るので好きな称号を一つだけ身に付けときなさい。（変更可）

ps . 少しでも身体能力を上げており、武器も適当に見繕ったときました。

話は通じるが文字は違うから気をつけなさい。」

「へ？・・・、ありがたいが、いきなり放置プレーかよおおおおお
お」

静寂に包まれた森の中1人叫ぶ変人がいたそうなの。

ブログ：旅立ちます（後書き）

誤字脱字の指摘や、ご感想など頂けたら嬉しいです。

第1話：能力

神様の粹な計らいにより森の中から旅は始まった。

「ん〜、こまつたなあ」

とりあえず、普通遭難した場合そこから動かないのが常識だ。見渡す限り森で、目印が有るなら迷わず歩くし、現代社会だったら動かないと選択しもあった。

(ここで待ってても、助けが来る確立はほぼ0に近いし、何より食料や、寝具がない！人がいないなら色々ためすか。)

先に何があるかを確認するため、本を片手に集中する。本が体と重なるイメージをすると、本の存在がなくなった。

「おお、すげえできたあああって、めっちゃきつうう！体力もってかれるううう」

予想外に体力が減りあわてて体から本を出す。少しの間なのにまるで1Kmダツシュしたような疲労感に絶望を感じつつあったが、ヒゲからもらった力を試そうと気を持ち直した。

「ハアハア、こりゃ慣れるまで相当かかるな、んじゃあ、能力の方を」と

刀を手にして、集中する。すると周りの木が倒れはじめた。倒れ方が様々で、切り刻まれた木、枯果ててしまった木、小枝程まで小さくなった木などがあった。

「お、中々使えるレベルまで効果範囲あるし問題ない」「ピコーン」
な・・・ってなんだ？」

本が少しの間輝いた。不思議な光景に若干ビビリながら本を開くとスキルの説明が書いてあった。

「ん、分身』『共有』『加速』『圧縮』あと、すこしだけ巻き戻しもできるな、さてと、さつさと近くの村にでも行きますか」

ちなみに先程の木はスキルを使った結果であり、その副産物として歩いて1時間くらいの所に村がある事がわかり、スキルの使い勝手の良さで気持ちが高ぶる中、迷うことなく村へと突き進んで行く。

村へ後少しというところで、何かの気配が後ろから迫ってきており、振り向くと一匹のクマタン・・・もとい黒くて大きな、目が赤色の手が木より太い熊が獲物を狩る姿勢でこちらを見ていた。

(太くて大きいです。／＼／＼じゃなくて！)

「GUAAAAAAAAA！」

「うひゃあああ~~~~、にげろ~~~~！あぶ！、この！』『分身』！」
現実逃避していたところを襲ってきた熊の一撃一撃で少しながら傷をおい、おそつてくる熊の攻撃をあわててよけつつ、もう1人の自分をだし、

「おわりだこの化け物が！』『減速』！』『加速』」

二人の声が重なり合い、動き出す。熊の動きが遅くなり、二人の姿が見えなくなるほど速くなる。

二人の動きが止まると、熊は血を噴出しバラバラに崩れた。

「うはあゝゝ、マジデ異世界にきちまったんだな」

「ああ、まじで死ぬかとおもったぜ」

「てか、さっきも思ったが切れ味良すぎね？」

「ああ、なんか豆腐きってる感じだな」

自分だった人が消え俺1人になり、一息ついていると、熊だった残骸から黒い霧が出てきておりゆらりと漂っていた。

「なんじゃこりゃ？ん？ああ、RPGでいう経験値かな？」

迷わず霧に手をいれると、からだは勝手に吸い取っていく。体の中で何か暴れるような感覚に襲われたが、たいした事も無く屈服させると身体能力がかなり上がったように感じた。

「なんかポカポカと温かいわ」 「ピコーン」

「わあ、またかよ、どれどれ？」

「闇の吸収：倒したモノの一部を吸いとり、自らの力とする。使えば使うほどより大きなモノまで吸収できる。魔専用」

「ちょ、魔専用って。俺って人として間違っただけか？」

禍々しいスキルのせいで生姜風呂に入ったあのように暖まった体を不思議とおもいつつ、村へと入っていった。

村に着くと皆、慌しく動いており、時折聞こえるモンスターだーと言う声で何か大変なことがおきつつあるのが分かるが、

「あの〜すみませ〜ん、忙しいところ申し訳無いですがどこか泊まれるところないですか〜?」

と、白ヒゲの似合う初老に差し掛かっているであろう男に声をかけた。

「おお、旅の方ですか?」

「はい、今、手持ちが無いので安全なことどこでもいいので教えていただけませんか?」

「なんと!、残念ですが今しがたグリズリーが村の近くに出たようですので安全なことなるとこの村ではないですよ」

と申し訳なさそうな顔で謝られた。

「ん?グリズリーって黒くて大きくて目が赤色の、手が木より太いあれですか?」

「そうそう、その凶暴な黒くて大きくて目が赤色の、手が木より太いやつです」

「ああ、それならついさっきそこで襲われたので倒しましたが?」

「！！！！」

「へ？」

ちよつとこちらへと言われ案内された家の中、出された茶？を飲んでみると奥からご老人がでてきた。

「村を襲いに来るグリズリーを退治していただき真にありがとうございます、

と、何かの袋をこちらに差し出しながらぺこりとお辞儀をしている。蝋燭の光を反射するそれに向かって、

「まぶさ、いえ、なんでもありません、ただ襲われたのを倒しただけですからそれはいいりません。あと頭を上げてください、僕のために」

「そうですね・・・、では、代わりに今夜はこの家に泊まっていければどうですか？宿代がうきますぞ」

「あ、ありがとうございますう、寝るところ探してたんですよ」

と半泣きになりながらハゲもとい、人工的な後光のさすやさしい天使のようなご老人に礼をいった。

「ホホホ、少々狭いが自由に使ってください。では、部屋の方案内しますぞ」

これまで空気のような存在になっていた初老の男が部屋まで案内してくれた。

「食事ができたらもってきますね」

といい去っていった。後で持ってきた食事に肉が入っていたのがさつき倒した熊の肉であろうと半ば確信しつつおいしくいただいた。

「ふう〜おなかいっぱい、ごちそうさまでした。初日からあんなんでできたけど、能力があるからなんだかいけそうな気がする〜」

と、弱気な気持ちを押し殺し食器もそのままにベットでねむってしまった。

第1話：能力（後書き）

スキル説明載せときます。

『分身』

平行世界の中で今の自分に限りなく近い世界の自分を発現する。

（逆もある）

『共有』

『分身』で得た知識を共有する。巻き戻しの効果により記憶が無くなることも無い。

『加速』

対象の時間を周りより早くする。（逆もある『減速』）

『圧縮』

時を圧縮する。使用方法は色々。

『闇の吸収』

倒したモノの一部を吸いとり、自らの力とする。使えば使うほどより大きなモノまで吸収できる。魔専用

刀（ざんてつけ）

なかなかいい切れ味、こんにゃくが切れない。

主人公

一文字 一（いちもんじ はじめ）

種族 人間

年齢 15歳（高校1年生）

身長 169cm

体重 55kg

特徴 黒髪で短髪、細身の体型、

第2話：心臓に悪い1日

夜が明け窓から朝日が差し込み、鳥たちが忙しく騒いでいる頃

「ん、あ~~~~、よく寝た」

起きて見ると知らない天井がみえたが、あまり深く考える性分でないので焦ることなく辺りを見回す。昨日の食器は綺麗に片付いており、代わりに水が置いてあった。

（おいおい、どっかの旅館か？サービス万点すぎるだろ）

気遣いに感謝しつつ水をいただき、頭がまわり始めるとふと疑問がうかんだ。

（朝は起きてこないと定評のある僕がこんなに早く起きるなんて、身体的特徴が少し変わったせいとか？まあ、損な事でもないし、どうでもいいか）

疑問は解決されぬまま、またそれもいかと短絡的にまとめ、素早く出発する仕度を済ませる。部屋を出るとご老人が、茶？を飲みながら何かを書いていた。

「おはようございます、とてもよくねむれましたよ」

「うむ、おはよう、喜んでもらえて何よりじゃ、ご飯も食べていきなされ」

「では、お言葉に甘えて頂きますね」

気がつく初老のおじさんがすでに用意しており、なにもなかった。はすのテーブルには料理が並んでいた。

（このおじさん昨日から何かとすごいな・・・）

やはり、昨日の熊の肉料理をたいたら家を出て行くことになると、老人が先程から書いていた紙らしきものをまとめてしる。

「旅の方、この紙を持って行かれるといい。この紙に癒す力を封じて入れて置きましたぞ」

「ありがとうございます！すごい助かります！」

「ホホホッ、道中お気をつけての」

心温かい長老（仮）の家を後にし、異世界に来てすがすがしい朝を迎えられた事を感謝しながら村を出た。

行く宛てが無いのでとりあえず近くに居そうな魔物を狩り、力を付けようと、『分身』、『共有』を使い村の周りを散策する。

するとその1人が人の悲鳴を聞いた。

（フラグキターーーー）

意気揚々と『加速』を使いながら悲鳴の聞こえた場所まで向かい、襲われていた人と魔物の間に体を滑り込ませ、魔物の攻撃を受け止め、そして、その腹を蹴りとばす。

木に叩きつけられた魔物は最初は驚いてはいたもののダメージらしきものはなく、目標を俺に変更し荒々しく吼えた。

「GUOOOOOOOOO」

魔物はパツと見トカゲだが、1mくらいとでかく、2足歩行。そう、いわゆる恐竜ってやつに限りなく近い。

と観察してるうちに痺れを切らした恐竜もどきが襲ってきた。とりあえず切り付けるとやはり豆腐のようにきれた。

(この剣の切れ味やべえな、どつかの名刀なんじゃないか?、とそんなことよりもフラグを回収回収)

もはや、刀に興味は完全に無くなりかけ、欲望に身を任せふらぐを全力で立てることに必死な悲しき15歳はじめである。

「大丈夫か?」

キラリと齒を輝かせ、できるだけ笑顔を向けて話しかけると、顔を赤らめながら喋りだした。

「／／／／あ、あぶない所、助けていただきありがとございませー!」

(お、これはいけるか?とりあえず怪我してるし治しときますか)

「ヒール」

助けた茶髪でツインテールの女の子を立たせ、所々破けている服から見える傷が痛々しいので、先程もらった紙を適当に「（文字が分からない）読んでみると、紙が燃えて消えていく代わりに、女の子の傷が瞬く間に癒されていく。癒えた傷と眼福の奇跡に感激していると本からピコーンと音が鳴った。

（うほww、もしかしてヒールも使えるようになったのか、うめえええww）

「まあ、傷が消えて、なんとお礼を言えばよろしいのか・・・」

「いってことよ、1人歩きは危ないぜ、一緒に行動しないか？」

「え？いいんですか、私、リン＝ケイフォードといいます、リンと呼んで下さい。」

「俺は「文字」だ、はじめとよんでくれ」

（おしゃあああ、フラグきっちり回収完了したぜ！）

ついでに魔物からでた霧もきっちり回収した。

「そういえば私、この道の先にあるケントまでいくのですがはじめさんもそちらですか？」

「ああ、そうだ。でわ、早速行こうか」

道は知らないが街があるであろう方角に向けて歩き出そうとしたと

ころ

「あ、待ってください」

（！しまった、方角がちがったのか？聞いとけば良かった・・・）

呼びとめられた事に方向を間違えたのかと知ったかぶりを恥ずかしがっていると、

「魔物の素材回収はいいんですか？」

「素材回収？」

「はい、この魔物だと皮とか爪が武器や防具につかえて結構な値段になりますよ？」

ちなみに昨日のグリズリーの皮と爪で王都の一般区で一軒屋を建てれるほどの価値があったのだが、まさかの序盤にそんな強さの敵と戦った事が分からないはじめは、

「そうか、それは知らなかった早速取っておこう、リンは休んでおいてくれ」

「フフフ、はい、そうさせて頂きますね」

笑われてしまったが、名誉挽回しようと宿で一ヶ月分にしかならぬ素材をせっせと集め始めるのであった。

道案内をしてもらいながら、しばらく歩いていると妙な胸騒ぎを感じ始めた。だが、経験の浅いはじめはそれが何なのかを分るはずもなく、その正体に気付いたときには魔物に囲まれていた。

「よっ！、はっ！とう！くそ、きりがねえなどうなってるんだ！」

次々と現れる魔物に悪態をつきながらも刀を振り回し黙々と倒す。ああ、戦国みてえだなあと場違いな思考をしていると、リンがおびえながらしゃべり始めた。

「どうやらこの近辺のボスだったグリズリーが倒されたので、このボスを決めるために魔物が活性化してるようですね」

「・・・あ、俺のせいなのね、どうすっかなあゝ、こっつ、マップ兵器的な感じなのが・・・」

魔物を次々と切りつけながらぶつぶつと呟き、考え始めたはじめを心配そうに後ろからリンが見ていると、いきなり抱き上げられてしまった。

「ちょっと失礼」「キャ」

何かを思いついたのだろうはじめは、抱き上げられ小さく悲鳴を上げるリンを抱えて木に登る。

「『分身』、『圧縮』、横一文字！」

分身により増えた自分が放った未熟な居あい切りだが、時間さえも『圧縮』された事により半径約100mの範囲のモノは全て切り倒された。

「『加速』、ふう、お前らはもう死んでいる」

ついでに空の敵は、様々な自分全部に加速をして空中の敵を全て切り倒したのだが、某作品のセリフを言うのに躊躇ためらわなくなるほどハイテンションになってしまった。

リンを木の上から降ろして、気持ちが悪いくらい大量にでた黒い霧をみてハイテンションから急激に鬱ふさになっていると、心配そうな声が聞こえた。

「大丈夫ですか？」

「ああ、ちょっと黒い霧の多さに気持ち悪くなっただけさ」

「黒い霧ですか？」

リンが不思議そうに辺りを見回している。内心で冷や汗をたらし、勇気を振り絞り、リンに疑問をなげかけてみた。

「んと、もしかしてこの一帯にある魔物から出たどす黒い霧が見えて無いのか？」

「ええ！そんな、私見えて無いです〜」

（まてまて、おかしく無いか？もしかしてこれも）「ピコーン」
いつものテンポ送れぎみなタイミングで音が鳴った。いやな予感し
かないまま、急いで本を開けると、称号の欄に

【闇を統べる者：能力を正しく認識するともらえる。闇を扱う力が
増す。又それに伴うスキルを覚えられる】

【人間失格者：人間やめるともらえる。人にはもう戻れない。枠に
縛られない動きができる】

力が増えた事を喜んでいいのか、人間やめたのを悲しむべきなのか
微妙な気分です。ウーウー唸りながら、闇を統べる者をセットし、吸
収率がダイブ上がった霧と、魔物の素材を回収しているとリンが話
しかけてきた。

「・・・それにしても、こんなに早く倒しちゃうなんてすごいです。
もしかして王宮の騎士様ですか？」

桁外れの能力を見た驚きからか、先程の会話を吹っ飛ばして、キラ
キラと尊敬と期待で目を輝かせながらはじめをじっと見ている。ど
うやら好感度あがったか？と勘違いしたはじめは、先程の事を忘れ
意気揚々と話しはじめた。

「いやあ、力をつけてくれた人が強かっただけの一般人だよ」

「お師匠さんも、こんなに凄い事できるんですか？」

本当の事はいわないが微妙に嘘とは言わない程度でごまかした。素
材回収も終わり、最後の霧を吸い終わると本が光り始め、

第2話：心臓に悪い1日（後書き）

評価くださった方ありがとうございます。
文章構成を検討し早めに修正ときます。

第3話・やめた弊害とイベント（前書き）

つたない文章ですがよろしければお楽しみください。

第3話：やめた弊害とイベント

先程までは見かけなかった馬車が俺たちの横を通りはじめ、歩いている人達もちらほら見かける。俺たちは今、森を抜け、草原を歩き始めている。

「やっと森を抜けたよ」

「ケントまでだと暗くなる前につきますよ」

太陽は真上にある。リンの一言によりやる気半分疲れ半分（精神的に）で歩き始めた。

腰ほどまで高さのある草のなか、幅が約2〜3mほどの道を歩いてみると、馬車に乗ったおっさんが気さくな低い声で話しかけられた。
（若本ボイス）

「お前さん達い、ケントに行くなら乗ってくかい？」

渋い声に動揺しつつ、ありがたいのではあるのだが、肝心の懐が寂しく、残念だが断る事にした。

「いえ、ありがたいですがお礼ができるほどのものがないので結構です」

「あああああ、それならぜひ乗って欲しいねえ」

訳が分からず聞き返すと。

「おめえさんの腰につけてるのが飾りじゃ無いならあ、魔物から守

ってもらえるだろう？」

「どうやら、乗せる代わりに馬車の警護依頼ってことか、向こうとしても経費削減でこちらは疲れないうまさに持ちつ持たれつである。」

「おお、それならまかせろってんだ、リンお世話になるつか？」

「はい、ステキなおじ様ありがとうございます」

「き、気にすんな困ったときはお互い様だぜえ！、早く乗らないと、置いていくぜえ」

「どうやらリンの笑顔にやられたようで、顔を真つ赤にしている。親父のツンデレは見たくなかったが馬車に乗れたので気にしないことにした。」

道中馬車の前に5匹程飛行形魔物がたが、謎の刀を振るいさつくり倒し、素材もきつちり回収した。なお、馬車の前に出たのは5匹だが、襲ってきたのは数十匹を超えていたり、新しいスキルがふえたのは気のせいだ。とりあえずもう一度本を開けた。

「ブラックボックス：闇を4次限空間として利用できる。いわゆる倉庫」

「ますます、人じゃ扱え無いスキルが増えていき、自分が何のために呼ばれたのが予想がつかないスキル構成になっていく事に恐怖を少し感じたが、若干中二病なはじめはそれよりも力がついていくことがうれしいようだ。」

「ちなみに隠れて倒した魔物はブラックメーカーで黒い人形を作り操

って難なく倒し、素材は闇にしまい、霧もとい毒回収もしておいた。

街に着きおっさんと別れがやってきた。

「じゃあな兄ちゃん、また縁があったらあ、めぐり合うだろう」

「はじめさんここまでありがとうございます、お礼がしたいのでお時間が有るときにでもここから見えるあの青い屋根のお屋敷にきてください」

おっさんとリンは馬車に乗り颯爽と街に入って行った。何故、リンと一緒に馬車に乗っているのかというと、やぶれた服を見せたく無い(こつちの理由)のおっさんに頼んで送ってもらった事にした。なお、依頼料に先程倒した5匹分の素材を渡したのでにこやかにやつてくれた。

「今思うとおっさんから服買い取ったほうが一緒に行動できたんじゃないか？」

少し寂しくなったが、こちらの用事もあるので別れて行動が結果的によかったかと持ち直し、検問を通ろうとすると呼び止められた。

「ちょっと待て、その黒髪！魔族が1人でここになんのようにだ！」
「応援頼む！、魔物がでた〜〜！」

いきなり槍や剣を突きつけられ、賑やかだった通りは泣き始める子どもたち、逃げ惑う人々により騒がしくなっていた。騒ぎを聞きつけた兵士が集まり始めた頃によろやくはじめが現状を把握し始めた。

「え？あああ、ちょっとまって怪しいが危害を加えるつもりは無い・・・ってあぶね！」

「だまれ！さつさと立ち去るがいい」

「ええい、魔物など切り捨ててしまえ！」

弁解をするが、早まった兵士が何人か切り付けてきた。あわててしまっていたのと、先程練習で使っていたせいで、黒い人形を出し全て防いでしまった。

「はわわ、誤解なんですうう、昨日まで人間だったんだよ〜」

「嘘をつけ、人に闇を使うことが出来るわけ無いだろ！」

「ちょっと落ち着きなさい、そして君も魔族なのは認めるのだな？」

赤色の髪に全身鎧を着込んだいかにも騎士です！お嬢様です！という方が出てきた。口を滑らせたはじめは魔族だとばれたが、先程の兵士と違い話せば通じそうなその物腰に感謝した。

「はい、一心魔族です」

認めたとたん殺気が先程と比べられないほど兵士から出てきたが、騎士がそれを制し、

「さて、確かに魔の波動を感じるが瞳が紫では無い、昨日まで人間とか言っていたがどういうことだ？」

召喚された事を省き、今までの事を特に毒について話すと一応の納得は見せたのだが、街に入れさせてくれなかった。

「魔物が暴れるように、いつ暴れだすか分からないような君を入れるわけにわいかない」

正論をいわれ、あまりの悲劇にはじめが泣きそうになっていると（リンに合えなくて）、哀れに思ったのか騎士が

「そんなみつともない顔をするな、君が安全と確認されるまで私の家にもくるがよい」

「ありがとうございます。俺はいちもんじ一文字はじめ一といいますが、はじめでも呼んでください。」

「ケティクルード＝シャレルだ、ケティとも呼んでくれ。さあ、後ろに乗れ、いくぞ」

騎士は青い屋根のお屋敷を指しそうだった。馬の後ろに乗ったはいが異性にここまで接近した経験はダンス（文化祭のあれ）しかなく、髪から優しい香りがでたり、つかまっている腰の柔らかさなどにあてられ気絶したり、もったいなくて起きたりを繰り返した天国のような時間をすごした。異世界に来て二日目、はじめは二人目の天使にあつたそう。

（～騎士視点～）

髪はショートで赤色、細い目は少々つり目で茶色の瞳をしている。鍛えられて引き締まった体だが、出るとこは出ているいわゆるわがままボディなお嬢様、ケティィシャレルは5年ほど前から王宮から派遣され、ケントで警備隊の隊長をすることになった。さほど魔物もでず、暇な毎日を過ごしていたところ、明日から王宮騎士隊と一緒に魔王討伐に駆り出されることとなった。明日への事を考えないと緊張してしまうので馬に乗って街を巡回していた。すると、今まで感じた事の無い強烈な魔の波動を感じ気付くとその方角へかけだしていた。

「くっ、なんだこの禍々しい雰囲気は、魔王でも襲ってきたか？」

近づくにつれ強くなる気配に不安を抱えながらその場所までついた。どうやら少年に向かって兵士が切りかかったようだ。すると、その影が伸び、いくつにも分かれたかと思うと人形になり、兵士の剣を受け止めてしまった。

「な、なんだと？」

いままで聞いた話の中で闇を模る^{かたど}など、魔王でないと到底できない芸当をやったのけた少年にすこし恐怖を感じた。

「はわわ、誤解なんですっつ、昨日まで人間だったんだよ〜」

「嘘をつけ、人に闇を使うことが出来るわけ無いだろ！」

「ちょっと落ち着きなさい、そして君も魔族なのは認めるのだな？」

話している感じは普通の少年なのだが、魔の波動はとてつもない。

そして極め付けが昨日まで人間だったである、要注意な人物として見なければならぬようだ。

「はい、一応魔族です」

やはり魔族だったらしく、口を滑らした事に観念したようすで、ポツリとしゃべった。とたんに兵士が警戒態勢に入った。んむ、なかなか良い統率であるが、少年に剣を向けるのはいささかしのび無いので収めてもらう

「さて、確かに魔の波動を感じるが瞳が紫では無い、昨日まで人間とか言っていたがどういうことだ？」

話を聞いていると、どうやら単に強い少年なのだが、その節々に危険な香りがする。魔物からでる毒がみえ、しかもそれを吸い力にする事、吸いすぎて人から魔族になったなどがあり、私から言わせてもらうと吸ったから魔族になったんじゃないかと、もともと魔族なのが吸って覚醒したにしか聞こえなかった。

「魔物が暴れるように、いつ暴れだすか分からないような君を入れるわけにわいかない」

そういうととたんに少年が泣きそうになってしまった。なんだかいたたまれない気持ちになる。

「そんなみつともない顔をするな、君が安全と確認されるまで私の家にもくるがよい」

「ありがとうございます。俺はいちもんじ一文字 はじ一といます、はじめでも呼んでください。」

「ケティクルード」シャルルだ、ケティとでも呼んでくれ。さあ、後ろに乗れ、いくぞ」

と、私の屋敷まで案内するが、明日から魔王討伐に行かないといけないことを今思い出し、喜んでいた少年に中々その事を切り出せないまま屋敷へとついた。

〳〳はじめ視点〳〳

日が落ち、騒ぎも収まった頃、騎士のお屋敷へとついた。遠くからだと分からなかった青い屋根は塗装だけではなく、屋根に詰まれた石が青白く光っていたからであった。昼は塗装により青にみえ、夜は石が昼間に蓄えた光りを放つそうだ。そんな不思議な屋敷に案内され入っていく。

「〳〳〳御帰りなさいませ、お嬢様」

「ただいま、ってお嬢様はやめてくれとあれほどいったのに！客が居るのにはずかしいでわないか！」

恥ずかしがっているケティもなかなかいいなと目の保養にじっくりと後ろから見ていると、1人のメイドがしゃべりかけてきた。

「いらっしやませ、お待ちしてましたわはじめ様。」

「なんだ？リンははじめの事知っているのか？」

リンが俺の事を知っているのが相当不思議なようだ。考えると、魔族に知りあいがいればそれは確かに疑問に思っだろう。俺も思う、魔族だけど……。

「はい、アルマ村からこちらに戻るときに魔物に襲われたのですがそこを助けていただいて、しかもここまで護衛してくださったのですよ」

ものすつごい笑顔でこたえたリンを直視できない俺は、隣に居るケティに視線を移す。なんだか納得したようなしてないような微妙な表情でこちらを見て。

「リンを守ってくれてありがとう、検問では失礼をしまして申し訳無い」

恩を仇で返す結果になってしまったと事に謝罪をしてきたが、はじめとしては今の女性9：男性1のハーレムにむしろお礼が言いたいくらい満足してたし、なによりあのイベントがなければお馬さんのひとときがなかったので逆にいいイベントだと勘違いしていた。

「いえいえ、そんな謝らないください、ここまで馬に乗せてもらってむしろお金払わなきゃって思ってたくらいだし……」

ケティにはお金払わなきゃのくだりが分からなかったがはじめの懐の大きさにほっとした。

「では、腹もへつただろ？一緒に夕食でもたべようか、皆、食事の準備に入ってくれ！」

「「「「はい、よろこんで」「」「」

メイドの返事にどこの居酒屋だよと心の中で突っ込みつつ、パタパタと入っていくメイドたちを見つめていて本に気付かないはじめてあった。

「ピコーン」

第3話：やめた弊害とイベント（後書き）

【変態予備軍：理性で抑えられないほどの欲望が出てしまう。】

ハ瞬間記憶装置：その容量は無量大、選ばれたものだけに使用する事ができる。なお人によって記憶できるものが変わってくる。ハ

第4話：街をでて・・・

目の前には湯気が立ち上りよだれがたれそうなほどおいしそうな料理がテーブルの上にびっしりと敷き詰められていた。

とはじめの分は料理が揃っているのだが、ケティはパンに鮮やかなのだが絶妙な量のおかず、ワインだけであった。

「では、そろつたみたいなのでいただきますか」

「はい」

「悪に立ち向かう私の心に、神の導きがあらんことを」

「いったただきまーす」

はじめは目の前の料理にがつつく。どうやらリンが料理を担当したらしく、ワインを注ぐときにほめてみると、みごとな天使スマイルをしてくれた。結構な量を腹に収め、満足すると、ケティの質素な料理に疑問が沸き、聞いて見た。

「こんだけ食つといてなんだが、なんでケティはそんなに質素な食事なんだ？」

「ああ、そういえば君には悪いんだが屋敷に泊められるのは今日だけなんだ」

しまった、変な目で皆を見すぎたのが原因か？それとも、実は懐が寂しいのに豪勢な料理作つちまったのが原因なのか？と全く見当

違うな事を考えているはじめに、ケティが続けてしゃべる。

「明日から魔王討伐に行かなきゃならなくてな、食事も儀式的なものだ。害は無いだろうが、一応魔族の君をここに置くわけにはいかんのだよ」

魔族のくだりでリン意外のメイドが騒ぎ始めたが、ケティが害は無いし、いざとなったら守るから心配するなとメイドに言う。

「……はい、お嬢様」「」

若干メイドたちの顔が赤いのは気のせいだ。うんきつとそうだとはいじめは思ふことにした。

「というわけで、明日朝早く市場を案内するから次の町へ出発してくれないか？」

「ん、魔王退治一緒にいきましようか？たぶん邪魔になら無いし、少しくらいなら力になれるとおもいますし」

俺役に立ちたいですとそんな雰囲気さをさりげなくかもしだし、その後ここで居座るという下心を必死に隠しつつ提案してみた。

「！！そうか、君なら後ろを任せて安心だな、是非頼む！」

ケティは今日一番の笑顔をはじめに向けた。はじめの下心は100万ダメージを受け、罪悪感にさいなまれながらも応える。

「ええ、では明日一緒に討伐よろしくお願いします」

「んむ、こちらこそよろしく、明日は早いから今日はもう寝るといい、リン案内してやってくれ」

異様なほど毒を吸ったおかげで肉体的に疲れはないものの、先程のダメージにより、ダウン寸前のはじめをリンが支えながら部屋へ案内してくれた。

部屋に着くとリンのおかげですっかり元気になったはじめは、ついた時から屋根の石になにか思うところがあったので、闇で身を包み窓から屋根裏へと移動した。

「すこしづつだが、毒がでてる？」

屋根の青い石から毒が出ている。なぜここに毒があるのか分からないが、そう害のある量では無いのでほおっておくことにし、部屋へ戻りぐっすりと寝た。

次の日、起きて見ると屋敷中メイドが騒がしく働いていた。明らかに、出発の準備だろうとこちらにあわてて走ってきたリンに聞いてみると、

「大変です、王宮の騎士様たちがここに来る間に襲われ半分以上死んでしまって、残りの方も戦える状態じゃ無いんですよ」

「へえええ、そうなんだあ」

これでケティ独り占めじゃんと思しる喜ぶはじめ、人として間違いない事だ。始めている事に気付かないほどおぼかであった。

「それだけだったら問題ないですが、騎士たちが魔王と戦わずして敗れたなどといえず、そこでケティ様1人で魔王退治してくれと、王宮の騎士が勝手に話し合いで決めてしまつて、はじめを道ずれにできないと先程御1人で出発してしまつたんですよ」

何気にリンもひどい事をいうと始めは聞いていたが、最後のくだりになったとき、怒りを通り越して心配のあまりかけだしていた。

「ケティ様は昨日と逆の門から出て行きました！」

教えてくれたリンに感謝しつつ、『加速』を使い、走る。市場の騒がしい声が割れ始めたあたりで体が耐えられなくなってきたので体を覆う様に闇を纏まと邪魔にならないように飛び上がる。纏まとっている闇を某ステルス戦闘機のように三角形に模かたどり、『共有』を使い魔法に特化した自分の記憶を吸いだし魔法を使う。

「
.....」

はじめ自身でさえも何を言っているのか理解していないが効果はあったらしく、まるで戦闘機のエンジンのごとく、爆音のなか黒い三角の物体が飛んで行く。魔法を使い続けてから1分も経たずに、目的の人影が見えた。速度を落とし、地面に着地すると同時に黒い馬を作り出しケティの横へいく。

「美しいお嬢さん、一緒にお茶でもどうですか？」

はじめはふざけて話しかけてみたが、話しかけられたほうは凄じ表

情で驚いていた。

「な、なぜはじめがここにいる!？」

「いや、ついさっきリンに教えてもらってさ、悪いね、朝寝坊しちゃったわ」

ケティはあわてているが、はじめは調子を変えずにしゃべり続ける。

「なんで、私についてきた？」

「ん？昨日約束しただろ？まさか、忘れたとか？」

「王宮の騎士も居ない今、魔王の城につけるか分からないのに？」

「そんな奴等いなくても、俺がいるから大丈夫だ」

「どうしてそんなにバカなんだ！いいから戻るんだ、一般人を巻きこむ訳には行かないんだ！」

「ハハハ、ケティ、おかしな事を言うもんだ。巻きこまれてるのは君じゃないか？」

的確な指摘により一旦たじろぐケティだったが、観念したのか神妙に話し出す。

「死ににいくのだぞ？」

「君は死なない俺がいるから」

「魔族の君が人を助ける？」

「ひどい、確かに今は魔族だが、ちょっと前まで人だったんだぞ！」

「信じると？」

「信じなくていい、ただそばにいさせてくれ」

「バカツもう勝手にしろ！」

フラグを立てる為、必死に笑顔で丁寧に対応していたはじめだが、怒らせてしまったと勘違いし苦笑いするしかなかった。だが、フラグはたつたらしく、魔王の城につくまでずっと顔を赤くしたケティであった。

第4話：街をでて・・・（後書き）

週2〜3をめぐりに更新出来る様にする予定ですのんびり見ていただけたら嬉しいです。

第5話・魔王の消滅と新たな魔王（前書き）

シリアス注意報、これ無いと進まないのので入れました。

第5話：魔王の消滅と新たな魔王

毒に包まれた城についたのだが、城の周りはドーナッツ状に崖があり橋すらかかってない陸の中の孤島である。はじめは飛べるので問題ないが、騎士たちはどうするつもりだったのかとケティに聞く。

「実は、ここに人が来る事自体少なくて、数年前には橋がかかってたらしいんだが・・・ハア」

ケティが悲しそうに立っている二本の棒を見てため息をついた。確かに、100人を超える騎士たちを乗せるための強度はなさそうだがすでに壊れてるし、橋がかかってなくて逆によかったのかと安心する。

「仕方ない、この近くの祠から下を通って向こうにいけるらしいからそこを使おう」

確かに祠は近くに見えているが、まさかあの魔物の巣窟のような雰囲気というか、気配駄々漏れの穴、むしろ罠に入る勇気の無いはじめは、

「『分身』、このくらいいいいな、二手に別れて地上の敵と祠を倒しておいてくれ、俺らは先に城にいつてくる。」

「分かった、んじゃあ綺麗にかたずけときますかあ」

「お、終わった俺らの方もよろしくな」

「な、な、なんだあ??はじめが沢山・・・どういうことだ?」

分身で出した沢山のはじめをみたケティがあわて始める。驚かれる

ことに慣れてしまったはじめは、実は分身の魔法を使えるんだと簡単に教え、ケティを抱き抱える。

「ちょっと怖いかもしれないけど我慢してねえええ」

「え？急にそんな、こんな時にこんな場所で・・・」

あわて始めたケティに疑問を持ちながら先程みたいに闇で戦闘機を模り魔法を唱え、一瞬の内に城にたどり着く。トリップしていたケティは何が起きたか分からないままいつの間にか、高さがケティの屋敷2階程の城門の前に立っていた事に疑問を持ったが、初めてあった時から驚きの連続だったのでなれたようで、

「とうとう、魔王城までついたのか・・・」

「そういえば、なんでこんな近くに魔王がいるんだ？侵略してこないみたいだし」

「どうやらこの城には何かしらの力が働いていて、そのおかげで魔物が強くなってしまつらしく、魔王はここからその強くする何かをばらまいているらしい」

はじめの疑問にケティは休憩をかねて門の前で話し始めた。

～～世界観～～

神様が大地創り、水を創り、森を創る。生命を作り、人を作り、魔力を与えた。

人が魔力を正しく遣うように神様が導き、その際出る毒を昇華する

よう、ある一族に技術と耐えうる肉体を与えた。しかし、あるとき戦争がおきて、力のある一族が戦いに駆り出されてしまう。人と人が力を使い争う中、出る毒を一族が昇華していたが、一族が次々と争いに巻き込まれ、処理できなくなった毒が充満するようになった。

大地や、水、森、生命が毒に侵されていく。もはや、人の住める土地では無くなってしまった大地を、一族の生き残り10人が身を犠牲にし、毒の侵略を止めた。毒の侵略は終わり、侵略から免れた大地で人々は争いを悔い、また、全滅した一族に感謝を捧げた。

歳月が過ぎ、あるとき、侵略された大地で毒を持った新たな生命が生まれた。新たな生命はつぎつぎと誕生し、人の住む場所を壊し始めた。人はそれと戦い始めたが、際限なく現われるそれを倒すことができず、また、大地を奪われ、おいやられていく。そんな戦いの中、魔王というモノがいる事が判明した。

~~~~~

「とまあ、こういうことだ、いるだけならまだ良かったが、どうやら毒を魔王が開放しているのを止めるために今回の遠征となったわけだ」

「なるほど、それでここには毒が充満しているのか」

「ああ、だから速く倒さないと汚染されてしまう」

「んじゃあ、さくつと終わらせましょうか」

門をケティが怪我をしないように守りながら片手で壊し中に入っていく。中へ入ると魔物らしき姿がどこにもないのでくまなく探して見たが王座はあるもののそこには魔王が座っておらず、呆然としていた。

「魔王はいない？ただの伝説じゃないのか？」

「しかし、現に毒はあるのだろうか？」

確かに濃厚な毒の気配がする。出口を探すために全てを吸い込んだ。すると毒が出ているのは王座の下かららしく、動かすと下への階段があった。降りようと決断した所でいつもの音が聞こえ

「ピコーン」

ハ心眼：見えないものが見えてくる。極めたモノにみえないものはない」

スキルの意味を勘違いしたはじめはポケモンの歌を心で歌いながら地下へと陽気に進んでいく。螺旋状らせんに建てられた階段の中、はじめの中で妙な胸騒ぎがした。

（なんか、魔王と戦ったのに、全然ドキドキしないなあ、むしろ落ち着くと言うか）

強烈な気配を放つそれに地下づくほど、安心してしまつ自分を不思議に思いながらも、どうやら目的地にいたみたいで、気を引き締めておく。どうやらでっかいドーム状になっているらしく、魔王らしきものが台座に座っている。魔王の容姿は全体的にいうと凄く醜いのだが、その髪は金髪に輝いており、枝毛もなく、まるで女性の髪のように美しかった。

「魔族がここになんの様じゃ！神聖なドームに入ったら命が無い事を知れ！」

「何が神聖だ！魔王よこの場所から出て行ってもらおうか！」

「魔族にたぶらかされた人になんぞ、説教されとおないわい」

「ならば、力ずくでいくまでだ！はじめ行くぞ！」

「あゝちよつと待つてね、皆落ち着こうか、『心眼』」

ケティと魔王の話を聞いていると少しずれているのが分かり、魔王を分析して見ることにしてみた。すると、

ステータス

名前： コロン・ド・ミルフィ

種族： 力のある一族

性別： 女

???： ???

???： ???

サイズ：??? ? ? ? ? ?

能力： ??? ? ? ? ? ? ? ? ? ?

真の姿に結構ショックを受けながらも確かめるため、聞いてみる。

「んと、コロンちゃん?ここで何してるの?」

「なぜ貴様がその名を知っている!?!」

こつちに凄い形相でにらめつける怖いそれにちびりそうになりながら続ける。

「スキルを使って見て見たんだけど、コロンちゃん力のある一族らしいけどほんと?」

「ふん、だから毒を押さえ込んでいる私を貴様が殺しにきたのじゃろ?」

「うーん、僕達は毒を防ぎに来たのにコロンちゃんがすでに防いでいるってことはどうしよっか?」

「わ、私に振られてもこまる、第一魔王が毒を振りまいてると思っ  
ていたし・・・」

「ピコーン」

皆で話しているときに本が光りだし、あわてて読む。

「器官修復：流れを整え毒を昇華する器官を直すことができる。――  
族専用。神様からの贈り物」

(・・・おk、把握、飛ばされたのはこのためか)

本を閉じ、もう一度心眼で魔王を見ると、かろうじて人の形は残っているものの、毒が体中を蝕んでいることがわかる。そういえば、声もかわいい声だったよなと思い、魔王に近づく。

「少し違和感があるが心配するな、すぐに楽にしてやる」

言い終わると同時に言葉の意味を勘違いした魔王が襲ってきた。右手に火、左手に氷をまとい攻撃してくる。少し恐怖を感じたが、それをよけつつ、黒人形で取り押さえる。そして魔王に手で触れ、毒

を慎重にすいだす。

「な、なんだと？直接吸われるとわ！くそ、は・な・せ！」

「もう少し我慢してくれ」

全ての毒を吸い終わる頃にはぶかぶかの服を着た13〜5歳くらいのかわいらしい金髪少女がポカポカと泣きながら殴ってきた。

「やめるのじゃ！これ以上大地を壊さないでくれ！頼む！」

どうやら激しく勘違いしているので優しく微笑みかけながら話す。

「ああ、分かっている、すぐに直すから」

ドーム状の真中にある水晶にてを掛け『器官修復』を掛けた。すると暗かったはずのドームは光り輝き始め、周りに充満していた毒は綺麗に流されていた。壊しに来たと思っていたコロンには何が起きたか分からなかったが、何千年も前に見た美しい光景を見て涙した。

「魔族なのに・・・なぜ直せる、なぜだ！」

「君を解放するために僕は神様に別の世界から連れてこられてきたんだ。もう戦わなくていいんだよ」

「うぐ、本当に直ったのか？もう守らなくていいのか？外へでいいのか？」

「ああ、一緒に外へ出よう。今度は僕が君を守るから。ここはもう二度と壊れない。」

空気のような存在になってしまったケティの手と笑顔になったコロンの手を引き聖地を後にした。

「ピコーン」

## 第5話：魔王の消滅と新たな魔王（後書き）

【優者】心優しき者、癒す力を習得できる。訪問販売によわい。聖属性の魔法の威力がます。

【魔王】容量超え毒を吸い続けて体が変化した最凶の象徴。何者にも屈しない霸道をつきすすめる。

ハ無の衣：魔法が通じ無いきたら最後脱ぐこともできない見えない衣

## 第6話・未知との遭遇（前書き）

土日は基本更新できないのでよろしくおねがいします。

## 第6話：未知との遭遇

日が真上まで上り、秋晴れのようすがすがしい日差しを浴びている。右手にはコロン、左手にはケティ、はじめ15歳至福のひとときであった。

「おお、そういうえば太陽とはこのように明るかったな・・・、空気もおいしいぞ！」

遊園地に来た様にはしゃぐコロンとは違いケティは先程から落ち込んだままだ。

「どうした、ケティ元気が無いぞ？」

「んむ、ケティとやらそんな顔してるとカビが生えるぞ？」

コロンと二人で励ますと、観念したのかしゃべりだした。

「だって、事情を知らないとわいえ、私は大地を守っているコロンを殺そうとしてここまでできたんだぞ？」

「なんだそのことが、無知は罪だが悪ではない、知った後の行動でその人の価値が決まるのだ、悔いているなら行動に移したほうが楽になるぞ〜」

はじめはちよつとした助言をしてやると、真剣な顔でケティが謝り始めた。

「勘違いをしていたとわいえ、剣を向けてすまなかつた」

「んむ、気にするでない今は過去の事などもはやどうでもいいのだ、はじめがおるからのぉ」

（んああああ、コロナGETか？GETなのか？くそ、後5年後だつたら手を出せたものを・・・）

コロナの頭をなで、背の低さを再確認してがっかりしているはじめ、はじめになでられ気持ちよさそうにしているコロナ、コロナを見て羨ま<sup>やいひ</sup>しがるケティであった。

話しているうちに城の周りの毒を吸いきったので、これからの事を3人で話あう。

「私は王宮への報告があるから、一旦街へ帰るがはじめ達はどうする？」

「ついていくよ、証拠と証人がいたほうが報告しやすいだろ？それが終わったら、のんびり大地を開放していくか」

「んむ、わらわもついてゆくぞ」

とりあえず街へ行くという事で、はじめは闇を纏い始める。

「んじゃあ、ひとつとびでいきますか」

街まで3分とかからずついたので、街中から歩いて屋敷に行くまでのほうが時間がかかるという不思議な体験をしたケティとコロナであった。

「「「お帰りなさいませ、お嬢様」「」」

屋敷についたとたんケティはメイドに囲まれて窮屈そうである。ちなみにはじめもその輪の中にちゃっかりいたりする。

(うひゃあああ、異世界にきて運氣あがってるぜ俺！)

騒ぎを聞きつけた動ける騎士たちが集まってきた。討伐をわずか半日で済ませたものだから、屋敷で待機していた騎士たちは逃げ帰ってきたと勘違いしだした。

「こんなに速く帰ってくるとは・・・、まさか逃げて帰ってきたのではあるまい？」

「女の癖に騎士になるなんぞ無理があつたみたいだな」

「逃げ帰る臆病者に騎士の名を語る資格は無い！」

「帰ったら王宮に連絡せねばなるまい」

「てめえらしい度胸してやがんな、自分の失敗を柵に上げてケティの武功にケチつけるなんて、くずばかりだ。」

「うああああ」

「ぎゃああああ」

「ひでぶっ！」

「か、からだか勝手に後へ・・・」

騎士たちの言葉を聞いて、傷つくのを通り越しあきれ果てていたケティを見て、はじめが騎士たちをぼこぼこにした。

「魔王討伐の証として、魔王の首飾りをとってきたんだ文句を言わせねえぜ！」

はじめは自分で作った毒の結晶を懐から取り出し騎士たちに見せびらかした。

「おお、なんとまがまがましい首飾りだ、魔王は討伐されたようだな」

「これで王様に顔向けができる」

「こんど生き残り討伐の祝宴のパーティを開こうでわないか」

「だれか俺をとめてくれええええ」

根性が知恵の輪のようにねじれ、絡まった騎士達はほっといて、食事をとる事になった。食事はすぐに用意され、目の前にはおいしそうな料理が湯気を出しながらテーブルいっぱい敷き詰められている。

「母なる大地の復活を記念して」

「~~~~~カンパイ~~~~~」

黙々と料理を食べながら体の異変に気がつく。先程から食べ物の味が少し薄く感じるのである。塩分が足りないとかではなく、舌からの情報が全く無いのである。魔族として着実に変化している。しかし、それに気付かないはじめは塩を頼んで料理にかけるという荒業により全く気付かないのであった。

「んま~~~~い」

料理をたらふく食べたので大陸の最南端にある王宮目指し、ケティ、コロソ、リンをつれてまたひとつとび。闇を纏ったまま凄いスピードで王宮の門の前に下りた。驚いた警備兵が続々とでてきては、警戒態勢に入っている。

「魔族が何用で現われた！」

「ケントより北の魔王城を開放した！報告をしたいたので王様への謁見を求める！」

「ケティ様！わ、分かりました、案内します」

ケティにその魔の波動どうにかならないかと言われたが、むしろ出たことすら気付かないはじめには苦笑いするしかできなかった。

城に入るとそこは豪華な飾りつけになっていた。上にシャンデリア、壁には絵が掛けられており、顔立ちがどこかにいてるので歴代の王族達なのがわかる。通路のいたるところに羽の生えた鳥が並んでいるのだが、それらに魔力が通っていて、有事のさいそれを操って戦うのだらう、豪華だが、実用性のある飾りに関心してしまった。しばらく歩かされ、3〜4mほどの大きな門が見えた、ようやく目的地に着いたらしい。ケティは緊張してきたらしく、顔がこわばっている。

「はじめ、王様に失礼が無いようにおとなしくしてくださいぞ！」

適当に相槌を打つ。門が開くと左右に人が沢山並んでおり、目の前には王様らしき人が豪華ででかい椅子に座っている。王は銀髪の腰

ほどのロングヘア、肌は透き通る様にしろく、王様と言うより女王と言ったほうがいいだろう。珍しそうに辺りを見回しているとケティに怒られてしまった。しかし、先程からいやな気配を感じているから警戒しないわけにはいかない。

「お忙しい中、御目にかか・・・」

「・・・」

ケティが始めの挨拶をしているのを聞き流しながら辺りを調べると、どうやら武官達が殺気だっている様だ。後、王座からも感じる。

「魔王討伐まことにご苦勞であった、貴殿の武功を評価し、公爵の位を与えよう」

「ハッ、ありがとうございます」

「領地の方はケントをそのまま授けよう。ところでそなたの後ろにいる少年は何だ？」

「ハッ、魔王討伐を手助けしてくれたものです」

「一文字 一です。よろしく」

重い空気の中軽やかに自己紹介をしたはじめ、武官ににらまれるも気にしないのであった。

「よいよい、んむ、では、はじめとやらは何を望む？」

武官達に怒りを抑えるように合図をし、褒美が何かを聞いてきた。

「んじゃあ、その椅子からどいてくれないか？」

「貴様、先程から失礼がすぎるぞ！」

武官からやじが飛ぶが、王様は動じてない。むしろ笑いながら動き出した。

「ん？どくだけでいいのか？ほれ」

王様がどくと、やはり少量だが毒が出てきている。

「ん、すまない、ここにもいるのか・・・、この城の下も聖域なのか？」

「ほう、なぜ貴様がこの城の下に聖域がある事を知っている？王族しか知らぬはずなのに」

「んじゃあ、ちょっと聖域直さなきゃな、悪いが通らせてもらっ、  
コロんいくぞ」

先程から玉座と俺の間に陣取っていた騎士達をコロんと共に飛びこえ、王座を動かす。すると、相当な量の毒が溢れだした。

「王様すまないね、ちょっと行ってくるから座るのキャンベンしてね」

「王よ、しばしまたれい」

「いや、私もついて行こう、そなた達が何をするのか楽しみだ」

武官の制止を振り切り、3人で螺旋階段を降り目的の聖域までやってきた。コロンの時と同じようにドーム状になっており、その中にはやはりひとつ今度は銀髪のドラゴンのような魔物がいた。

「『心眼』」

ステータス

名前： マリン・ド・ミルフィ

種族： 力のある一族

性別： 女

称号： ????????

属性： 水属性

サイズ： F?? ? ? ? ? ? ? ? ?

能力： ?????? ? ? ? ? ? ? ? ?

へ？ド・ミルフィってことはコロンの親戚？？サイズの所のFが凄く気になるが先に名前のことをコロンにきいてみる。

「なに？姉上だと？生きて・・・」

嬉しさのあまりコロンは泣き出してしまった。助けようと近づいてみると、マリンの方はこちらに気付かないくらいに弱っているみたいだ。

「すぐに楽にしてやる」

慣れてきたためコロンの時より体に負担がかからず、なおかつ素早く吸い取ると、銀髪で膝辺りまであるロングヘアの、ケティに負けない位のナイスバディが現われた。

Fはこれだったのか！と機嫌がよいはじめとは逆に、マリンは体調が悪そうなので回復魔法をかけて見る。ゆっくりと目が開いた。

「おはようございます、姉上！」

「おはよう、マリン」

いつも道理の下心スマイルでお出向かえする。すると、驚きながらも向こうがしゃべり始める

「ああ、逢いたかった私のダンナ様！！」

「へ？」

「なぬ？」

マリンにいきなり抱きつかれ、天国に行きかけるはじめ、それをみて不思議に思うコロンであった。

第6話：未知との遭遇（後書き）

ステータス強制変更

魔神：魔族の中で最も強きモノ。

ハ省工ネ：そんなに食わなくてもよくなる。三度の飯より・・・を  
体現できる！

第7話・始まりの終わり（前書き）

更新遅れてすみません^^；

## 第7話：始まりの終わり

聖域を直したため、ぼんやりと光りだした螺旋階段をはじめはニヤニヤと不気味に笑いながら上がっていく。はじめの腕の中にはマリンが抱きつく形で居座っていて、いわゆるお姫様だっこをしている。なぜこの様になったかというところ。

「初めまして、マリンさん、体調はいかがですか？」

「助けていただきありがとうございます。体調は・・・ああっ」

「姉上、大丈夫ですか!？」

「まだ、立てないようですね、肩を貸しましょう」

「はい、ではお願いします。」

と言う流れのもと肩を貸したのだが、首に腕を絡ませられてよりかかられたものだから調子にのってお姫様抱っこを実行、嫌がらずむしろギョっとされたのでこの形となった。

「私、マリン・ド・ミルフィと申します。お名前の方教えていただけますか?」

「一文字いちもじ一だいち。はじめとでも呼んでくれ」

「はじめさん、宜しくお願いします」

マリンには申し訳無いが、はじめは挨拶そっちのけで腕の中のぬく

もりに酔いしれている。

「はじめさん、いきなりで悪いんですが独身ですか？」

「・・・はい、独身です」

本当にいきなり深い所をさされ、ショックをうけるはじめであったが、

「良かった！私のダンナ様になっていただけませんか？」

「はい!?!」

「なに！はじめはわらわのじゃー!」

あまりの展開にびっくりする。興奮するマリンから話を聞いてみると、昔、聖域にマリンがやってきたときに護衛をしていたのが王宮の初代国王らしく、必ずマリンを助けてくれる人が来てくれると元氣付けてくれて、死ぬ間に生まれ変わって助けに来るとか言ったらしい。なんでも顔があまりにも似すぎたため、生まれ変わりだと思われてしまった。

「これからもよろしくお願いしますねはじめさん」

「はい、喜んで!」

「わらわも宜しくするのじゃああ」

にこりと笑うマリンに外の光りがあたる。勢いで了承してしまった

はじめは外にでてから鬼に変わったケティと、ずいぶんとわがままになったコロンにたっぷりしぼられるのであった。

「我ら人の犯した罪の深さを教えてくれてありがとう」

地下から出た女王は、はじめ達に深く頭をさげた。伝承によると、下のドラゴンにここを守ってもらったため閉じ込めたと、どうやら、初めて本当の事を知って後悔したらしい。

「そして、真に身勝手ながらも依頼をしたい。はじめよ、この大地にいる全ての一族をすくってくれ」

「はい！よろこんで！」

はじめは、先程から痛い視線を感じていたので、速くここを離れることができるならと返事を素早く返した。

「んむ、今回の功績を評し、そなたに大地を救う勇者として旅ができるよう支援をすることを約束しよう」

「ありがとうございます」

「では、また何かあったら言ってくれ。今日はこれにて解散！」

廊下へ出ると一斉にみんなが騒ぎ出した。

「—!その女はだれだ!—は私と一緒になるのではないのか?」

「はじめはわらわのものじゃ!」

「あらあら、だんな様は渡しませんよ?」

王宮から急いで言い争う3人をつれてケントへと帰る。闇の中で言い争いをしていたが、つく頃には仲直りしていた。どうなったのか聞いてみると3人のうち誰かがあきらめるまで3人もの物になったらしい。分身もできるので独占もできないのでこつこつという形になった。

日も暮れ、街に灯りがつく頃、ケントから8つの方角に向け、黒く光る塊が夜空に散っていった。

## 第7話・始まりの終わり（後書き）

第一章の一旦終わりと言う事で、残り、ちょいちょい追加していきます。

第二章は10月をめどに書いていきますのでよろしければいらなく  
ださい。

北・ケイン・ド・ミルファイ(前書き)

ここから先時間軸が少しおかしくなります。

## 北：ケイン・ド・ミルファイ

日も暮れ、街に灯りがつく頃、ケントから8つの方角に向け、黒く光る塊が夜空に散っていった。

はじめは闇を纏<sup>まと</sup>い音速をこえる速度で進んでいる。今回向かうのは北の大地である。

~~~~~魔王サイド~~~~~

いつもと変わらないどす黒い毒に包まれながら、この器官を直す方法を探す。なぜ、こうなったのだろうをいつも思う。平和だった日の事を思い出そうとするが、何年も、何十年もどのくらいかも分からないまま閉じこもっているので、愛する人の名前以外思い出せない。

今日もまた、上から来た魔物をやつつけて外に出す。いつもと変わらない日々をすごしていた。これからずっとこうだろうと思っていた。黒髪の少年が来るまでは……。

その日は何もかもが違っていた。魔物の襲撃がなく、聖域が少し復活し、器官から溢れる毒が急激に弱くなったのだ。私は多大なる不安と少しの希望を覚えた。毒が無くなる原因としてわ、人間が少なくなるか……、器官が修復されたかのどちらかだろう。

何故か推測していると、不意に魔の波動を感じた。いつも道理、蹴散らすつもりでいたのだが、その気配はどんどん増すばかりで一向に現われない。もはや、私の手におえないほどに強まった波動の正体が現われた。

12〜3歳くらいの黒髪の少年と見かけは普通であったが、油断できない。少年はぶつぶつと独り言をつぶやくと不意に話し始めた。

「ケイン・ド・ミルフィさんですか？」

「ああ、そつだ、魔族が何のようだ」

「なるほど、早速では悪いんですが、その毒いただきます」

言い終わると凄じ勢いで近づいてきた。反応が遅れ、腹に一撃もらいそうになるが、なんとか距離をとった。

「逃げないでください。おとなしくしてくれたらすぐにもコロンやマリンのもとに連れて行って上げますから」

「き、貴様、妹達に何をした！ぐあつ、放せ！殺してやる！」

魔族の言った言葉に気を取られたすきに体中、闇で覆われつかまってしまった。

「すぐ楽にしてあげます」

腹に手をあてられると、今まで吸ってきた毒が体中から抜かれていく。魔物の力となる毒を取られてしまった事に絶望を感じた。力の強まった魔族は器官へと歩き出す。

「やめろ、それを壊すとこの大地は人も魔物も住めないことになるぞ！」

「知ってますよ」

魔族はにっこりと微笑むと同時に目の前が急に光りはじめ、明るくなっていく。

「こ、これは？なにをしたんだ？」

この感じは、例え全てを忘れたとしても知っている。細胞が語りかけてくる。昔、この大地が毒に侵される前の聖域の波動である。

「器官を直しときました。もう、何がおきても壊れませんので、ここにいる必要はありませんよ、他の一族も皆無事？ですので心配せずについてきてください」

何が起こったのか、さっぱり分からないが、一ついえるのはもうここにいなくていい事である。聖域の力を発揮したこれに近づける魔物はいない……

「魔族がなぜ？貴様は何者だ！」

そう、いないはずなのに目の前にいる魔族は平気そうにしている。

「ついこの間まで人間だったのに……、みんな冷たすぎだよ！いいもん、マリンに慰めてもらおうもん」

「なに！貴様マリンとどんな関係だ！」

ケインの疑問の矛先は完全に変わった。重度のシスコンであるケインにとって、先程の疑問などもはやどうでもいいレベルまで下がってしまった。

「今、マリンさんとお付き合いをしているはじめと申します。絶対に幸せにしますんでマリンをください!」

「な、貴様、どこの馬の骨が分からん奴にマリンはやらん!」

「ええ〜そんな〜〜なんとかお願いします、何でもしますから〜」

「ここにいてもしょうが無い、マリンの所へつれていけ!話はそれからだ!」

「はい!ただいま!」

~~~~~

助け出した人に主導権をとられてしまったはじめはケインもろとも闇で纏い、真っ黒い夜空へと飛び出し溶け込んでいった。ケインは婿気取りのはじめに怒ってはいるものの、一族の待つ場所へ行く事、帰れる事に感謝した。

北：ケイン・ド・ミルフィ（後書き）

シリアスってどう書けばいいのかわかりません。^^^；

誤字脱字の指摘、感想など頂けたらうれしいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9750h/>

---

今日から・・・

2010年10月25日01時54分発行